

学 位 論 文 題 名

Die IPP-Konstruktion im Deutschen
Aus generativ-komparativer Sicht

(ドイツ語における IPP 構文 生成・比較の視点から)

学位論文内容の要旨

本論文はドイツ語 (=標準ドイツ語) の IPP 構文 (IPP-Konstruktion) の構造を生成文法のミニマリストプログラム (minimalist program) の枠組みに従い、ドイツ語の方言 (スイスのドイツ語、バイエルン方言)、中世のドイツ語 (中高ドイツ語)、他のいわゆる西ゲルマン語と方言 (英語、オランダ語、オランダ語西フランドル方言 (Westvlaams)、西フリジア語 (Westerlauwersk Frysk)、アフリカーンス語) との比較を交えることによって解明することを目指したものである。

ドイツ語は英語を除くいわゆる西ゲルマン語と同様に、枠構造 (Satzklammer) を有するが、次の用例が示すように、従属文の文末に置かれた動詞群 $V_1 V_3 V_2$ は、主要部後行 (kopf-final) の下域 (Unterfeld: $V_3 V_2$) と、例外的に主要部先行 (kopf-initial) の上域 (Oberfeld: V_1) から成るという特徴を示す。

(i) ... daß er unbedingt hat arbeiten wollen

(ii) 上域 [...hat: V_1] 下域 [arbeiten: V_3 wollen: V_2]

IPP 構文 (IPP = infinitivus pro participio) とはこの上域をもつ構文を指し、 V_2 が過去分詞のかわりに例外的に不定詞、すなわち代替不定詞 (Ersatzinfinitiv) として現われる形態的な現象を伴う場合に、これを IPP 効果 (IPP-Effekt) と呼ぶ。本論文は、従来のいかなる分析もドイツ語の IPP 構文における主要部先行型の動詞順序を正しく説明できないことを立証し、これにかわるまったく新しい分析を提示しようとする試みである。

まず、第1章において、IPP 構文の記述とミニマリストプログラムの解説を概略的行なうことを通じて、対象の設定と方法論上の基盤が明示される。

次に、第2章において、従来のすべての分析が不十分であることが示される。すなわち、Evers (1975) の Verb Raising による主要部移動では、動詞連鎖に別の句が入り込む場合を説明できないこと、Haegeman/Van Riemsdijk (1986) による Verb Projection Raising では、再分析と倒置の制約が不明であること、Haftka (1994) の外置、および Zwart (1993) のアンティシンメトリー分析では、構造上最も高い位置にある不定詞に zu がつくことを説明できないことが論拠として挙げられ、いずれも正しい説明になっていないとして却下される。

第3章では、英語の不定詞マーカー *to* にたいして、ドイツ語の *zu* が INF L ではなく、動詞にたいする主要部付加構造の関係にあることを明らかにした上で、ドイツ語では上域の動詞は主要部先行の機能範疇 INF L に移動することによって、IPP 構文の変則的な語順が生まれるという主張がなされる。さらに、最大範疇を形成しない再帰動詞の *sich* や虚辞の *es* の一部、それに心態詞 (Modalpartikel) もこの主要部先行の INF L に付加されると指摘される。また、これに関連して、機能範疇における主要部の位置の一貫性にかんする仮説が提案されている。

第4章は、IPP 効果の形態的な特徴の解明を通時的な説明に求めたものである。ここでは、Den Besten/Edmondson (1983) の助動詞の階層性を援用しつつ、Gottfried von Straßburg の叙事詩 *Tristan* のすべての用例を実証的に検討することによって、中高ドイツ語と現代ドイツ語の IPP 構文が比較なされる。そして、助動詞性の高さという観点から、IPP 効果を統率の方向制約によって説明しようとする従来の考えかたに根本的な異議が唱えられる。すなわち、動詞複合体は IPP 効果の原因ではないが、既に存在した IPP 効果を保護する役割を果たし、IPP 動詞を支配する動詞は強い素性 [+INF L] をもつに至ったのであり、そのような動詞が主要部先行の INF L に付加して IPP 構文を形成すると考えるのである。

第5章では、動詞複合体はなぜ IPP 効果を保護できるかという問題が扱われる。これにかんして、本論文では過去分詞は形態照合されなければならないこと、そして、Y が主要部であり、同時に X と姉妹関係にある場合にのみ、Y は X によって形態照合されるという仮定がなされる。そして、この仮定を3項動詞が現われる場合の6つの表層語順にかんして、ドイツ語の方言と他のいわゆる西ゲルマン語の振る舞いに照らし合わせた結果、次の予測が正しいことが証明されるに至る。

- (i) 語順が $V_3 V_2 V_1$ 、 $V_1 V_2 V_3$ 、 $V_3 V_1 V_2$ 、 $V_1 V_3 V_2$ の場合には、 V_2 が過去分詞であることも IPP 動詞であることも可能である。
- (ii) 語順が $V_2 V_1 V_3$ の場合には、 V_2 が IPP 動詞あることはない。
- (iii) 語順が $V_2 V_3 V_1$ の場合には、 V_2 が過去分詞であることはない。

$V_2 V_1 V_3$ の語順で IPP 効果を示すもの、および $V_2 V_3 V_1$ の語順で IPP 効果を示さないものはともに存在しないことから、上記の仮定の正しさが実証的に証明されることになる。

第6章では、動詞複合体の形成過程という残りの問題に取り組んだものである。それによれば、IPP 構文に現われることの多い話法の助動詞および使役動詞 *lassen* の示す現象の考察を通じて、動詞複合体は統語部門で形成されるという従来の意見にたいして、反論がなされる。それによれば、動詞複合体の形成は、各々の動詞のあいだで主要部付加が起こるという項構造の内部において説明するべきであるということになる。また、このことによって、オランダ語における分離動詞の前綴りの位置の交替にかんしても、より経済的な原理にかなった説明できることが明示的に示される。

以上の考察を経て、ドイツ語の IPP 構文の構造が明示的に論証されることになる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 植 木 勉 子

副 査 教 授 高 橋 英 光

副 査 助 教 授 清 水 誠

副 査 助 教 授 山 本 文 彦

学 位 論 文 題 名

Die IPP-Konstruktion im Deutschen Aus generativ-komparativer Sicht

(ドイツ語における IPP 構文 生成・比較の視点から)

本論文はドイツ語(=現代標準ドイツ語)における上域を伴ったIPP構文と代替不定詞、すなわちIPP効果にかんする生成文法の最新の理論による分析である。現在の生成文法は、人間の言語能力の核心部分をなす普遍文法の諸原理は最小であるという仮説(ミニマリストプログラム)に基づいて進められているが、それに呼応して、個々の言語のパラメーターを考慮することによって、この仮説の正当性をより効果的に追求しようとする姿勢から、急速に類型論的な視野を取り入れるようになってきている。本論文はこの研究の流れに沿うものであり、その最も新しい手法を積極的に採用し、実践した点が第一に評価できる。目的とする対象はあくまで現代標準ドイツ語でありながら、上記の理論に依拠しつつ、ドイツ語の方言とその古形、それにいわゆる西ゲルマン語に属する多くの言語の用例に基づく批判的な分析は、本論文の本質的な部分に深く貢献するものであり、論者の有する広範囲のデータ処理能力と明晰な判断力は、この分野の研究者としてのすぐれた才能を証明するものである。とくにオランダ語にかんする考察は、長期にわたる同言語への取り組みの成果を示している。

論者はまた、ドイツ・ミュンヘン大学での留学を契機として、現地の若手研究者と積極的に交わり、各言語・方言のインフォーマントについて調査を行なうことによって、データの正当性にも十分に注意を払っている。加えて、中世のドイツ語にかんしては、時間と労力を惜しまず、綿密な実証的態度を貫いている。これは、理論の構築だけを目的とした論文にありがちな片寄った態度や経験的事実の軽視という短所とは、本論文の論者が無縁であることを物語るものである。

本論文は種々の独創性にあふれているが、とりわけ、ドイツ語では機能範疇INFLが主要部先行であること、そのINFLにV₁が付加することによって上域の存在が統語論的に保証されること、そのV₁は助動詞性の階層において上位に位置する要素であることの3つの指摘は重要である。従来の説によれば、ドイツ語の機能範疇INFLは主要部後行であり、V₁の上域へ移動は統率の方向性によると考えられてきた。それをオランダ語西フランドル方言やスイスのドイツ語からのデータを検討することによって、見事に覆す

に至ったのであり、斬新で説得力に富んでいる。そして、この3点を相互に有機的に関連づけることに成功したことは、言語理論構築上の要請としてもっとも高く評価されるべき点である。

本論文の独創性は、たんにデータの量的な積み重ねや理論の機械的な操作だけに基づくものではない。それは日本人として外国語であるドイツ語およびいわゆる西ゲルマン語を客観的に考察し、日本語の構造を発想の原点として、まったくタイプの異なるヨーロッパの言語の分析に生かしていると思われる点に求められる。それはI P P効果を保護する動詞複合体の形成が、各々の動詞が句をもち、それが次の段階で主要部移動によって統語論的になされるのではなく、より以前の段階で各々の動詞それ自体の主要部付加によるという主張に端的に現われている。これには日本語の複合動詞の形成と膠着語的な類型論上の特性が背後にあると考えられ、そこから生まれた発想であろうと解釈できる。それが結果的に生成文法の標榜する経済性の原理により適切に即応し、同時にミニマリストプログラムにおける形態論の扱いにかんしても論者独自の見解を提唱することにつながっている。

最後に、本論文のドイツ語は語学的にまったく問題のないものであり、ドイツ語の運用能力においても、論者がきわめてすぐれた力量を備えていることの証しとなっている。しいて難をいえば、統語論的な射程以外と思われる言語規範や語用論にかかわる現象までも説明しようとする気負いがわずかに見られる点である。しかし、これとて論者の旺盛な意欲のあらわれと解釈することができ、本論文の価値をけっしておとしめるものではない。扱った言語・方言は網羅的ではないが、論証に必要な十分の範囲にわたっている。今後、北ゲルマン語にも取り組めば、さらに大きな成果が得られるものと期待される。

結論として、本論文は生成文法研究の分野で国際的に通用する業績と評価することができる。若手の研究者を中心に進展が目覚ましい同分野においては、新しい理論的提案が刻々となされている。ドイツ語で書かれた本論文を何らかの形で迅速に公刊し、時機を逸せずして広く内外の研究者の目に触れさせ、議論の俎上にのせることが今後の緊急の課題といえる。

以上の審議結果から、審査委員会としては一致して本論文が博士（文学）を授与するにふさわしい学位論文であるとの結論に達した。